

大規模英語プログラム運営におけるデータ活用と課題

岡 田 圭 子
(獨協大学経済学部)

Data-based Management in a Large-scale University English Language Program

Keiko Okada
(Faculty of Economics, Dokkyo University)

Summary

This article discusses the use of various kinds of data in a large-scale language program. In 2005, a student satisfaction survey was conducted in the Interdepartmental English Language Program at Dokkyo University and, contrary to our expectations, only 30% of the students responded positively. Since then, various efforts have been made to improve the quality of the program, utilizing the data we obtained from different origins. These efforts were recognized in the form of a MEXT GP grant that was awarded to the program in 2009. The program data were obtained from student evaluations, satisfaction surveys, Can-do List questionnaires, student feedback forms to English learning advising sessions, and other sources. This article explains how the program based its reforms on these data and obtained positive results, and suggests a need for greater involvement by the university administration and offices.

キーワード：全学共通カリキュラム英語部門、EGAP（一般学術目的の英語）、自律学習者、LMS（学習管理システム）、英語学習ロードマップ

Keywords: Interdepartmental English language program, EGAP (English for General Academic Purposes), autonomous learners, LMS (Learning Management System), English learning roadmap

0. はじめに

本稿では、埼玉県草加市の私立大学・獨協大学で展開する共通英語プログラムを取り上げ、「大規模英語プログラム運営におけるデータ活用と課題」について実践報告する。まず、本学プログラムの教育目的を概観し、その効果的な運用のためにどのようなデータを活用できるかについて考え、本プログラムが採択された GP 事業の中でそれがどのように活かされたかを考える。最後に今後の課題について考える¹⁾。

筆者は獨協大学全学共通カリキュラム外国語科目英語部門（以下全カリ英語と略す）において、長年にわたりコーディネート業務に携わってきたが、その中で、教員一人一人の教育力だけでなく、プログラム全体としての教育力を上げ、結果的に学生の満足度を高めるためにはどうしたらよいかについて考えてきた。2009年に文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に採択された取り組み『学士力育成に資するEGAP英語教育の充実』を実施する中で、プログラム全体の効果を可視化し、結果的に学生の満足度を上

0. はじめに

1. 獨協大学全学共通カリキュラム英語部門の教育目的
2. 活用データの種類と実例
(GP事業を中心に)
3. まとめと今後の課題

図1 本稿の構成

げるためにデータの活用が非常に重要だということがわかってきた。ここではその取り組みを報告する。本稿の構成は図1に示すとおりである²⁾。

1. 獨協大学全学共通カリキュラム英語部門の教育目的

大学教育は、大学の教育理念の実現に貢献すべきであり、それは、学部教育のみならず、教養教育、外国語教育においても希求されるべきものである。1964年創立、2014年に50周年を迎えた獨協大学の建学の理念は「大学は学問を通じての人間形成の場である」であり、全カリ英語もいかにこの理念を具体化していくかを考え実践すべきである。さらに、2003年にスタートした本学全学共通カリキュラムは「新しい教養主義」を掲げ、「21世紀の実社会に貢献しうる国際人の育成を目指す」としている。これを全カリ英語教育の場面でとらえなおすと、図2に示すように、すべての大学生に必要な基礎教育を英語と関連付けて行うべきだという筋道が見えてくる。このことを踏まえて、全カリ英語では、大きく二つの教育目的を定めている。一つは、EGAP (English for General Academic Purposes) 教育、もう一つは自律学習者の育成と支援である。

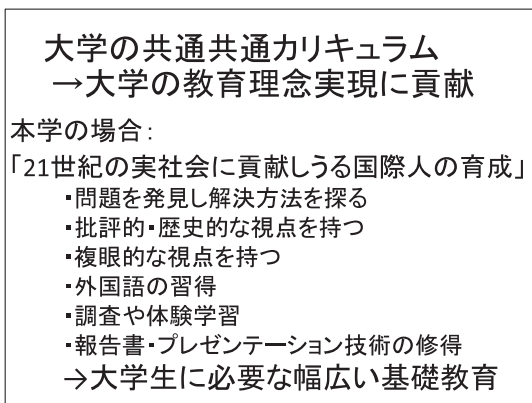


図2 全学共通カリキュラムの目指すもの

1.1 EGAP (English for General Academic Purposes) の教育

大学教育における学術目的の英語 (EAP: English for Academic Purposes) は ESAP (English for Specific Academic Purposes) と EGAP (English for General Academic Purposes) に分けて論じられ、その相違についてはすでに諸文献に詳しいが (Jordan, 1997; 田地野・水光, 2005 他)、主に大学1、2年生が履修し、学部横断型の共通英語プログラムである本学全カリ英語プログラムは、学生の専門分野にかかわらず共通して身に付けなければならない基礎的な言葉の技能を教えるという意味で、明確に EGAP を目指すべきである (岡田・飯島, 2012)。図4で示すようなスタディスキル (Jordan, 1997) などを中心に、3、4年生になってからの専門分野における専門書の講読や研究発表、また卒業後に就いた職業における知的な活動の基礎となる言語技能の基礎を訓練することが重要である。したがって、共通英語プログラムで学生が訓練を受けるのは、一般的なコミュニケーション英語 (EGP, English for General Purposes) ではなく、また、就職活動で必須と言われる TOEIC® テストで高得点を取る技術でもない。Jordan (1997) がスタディスキルの一つとして挙げている examination skills は、英国の学部課程で行われる長時間の論述試験などを指しており、EGAP 教育でも目指すべきスキルである。

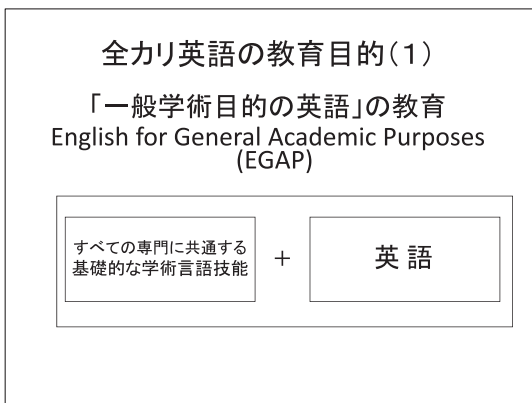


図3 全カリ英語の教育目的 (1)

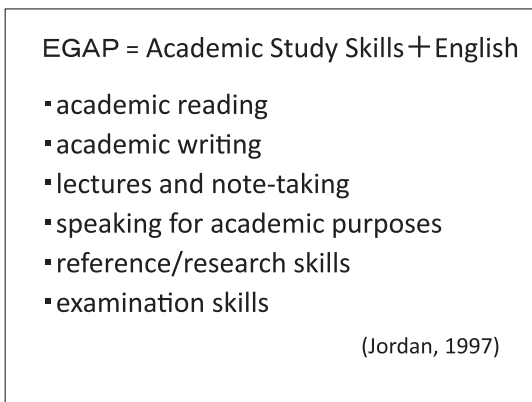


図4 Jordan (1997) の study skills

1.2 自律学習者の育成と支援

全カリ英語のもう一つの教育目的は「自律英語学習者の育成と支援」である。自らの学習に責任を持ち、学習を計画・実行・修正できる学生を育成することについては、すでに多くの研究がなされている (小嶋他, 2010)。全カリ英語では、学生に対し授業・学内で実施される各種講座・学内の外国語学習関連施設設備についての情報を統合して

提供することを通じて学習環境の整備を図っている。さらに、学生が授業外でも積極的に学習する習慣を身に付け、それを継続できるよう、4年間の学習支援を行っていくことを目指している。

以下の第2節では、全カリ英語の二つの教育目的を実現するために、どのようなデータを用いているか、その種類、活用する理由、活用の実際について概説する。

2. 全カリ英語で活用しているデータについて

2.1 データの種類

全カリ英語プログラムがかかわるデータの種類の、表1に示すように、おおよそ5種類に大別される。

表1 全カリ英語がかかわるデータの種類

データ種類	学生	授業担当者	プログラム運営者
1) 大学実施データ ・授業評価 ・全学 TOEIC® スコア	TOEIC® スコアで自分の実力把握、目標設定を行う。	授業評価に基づく授業改善を行う。	TOEIC® スコアに基づいてクラス編成を行い、開講科目、共通シラバス、教材選定などに活かす。
2) 全カリ英語データ ・プログラムアンケート ・科目別アンケート	プログラム・科目へのフィードバックを行う。	担当科目について学生のフィードバックを知り、授業改善に活かす。	プログラムと各科目への学生のフィードバックを知り、問題点を抽出するとともに、改善の方策を検討する。
3) LMS 搭載データ ・Can-do List ・英語学習ロードマップ ・多読・多聴リスト	スキル別目標確認と定期的な自己評価を行う。4年間を通しての自らの学びを計画・把握する。	担当科目の到達目標と、担当クラス学生自己評価を知り、シラバス・教材作成・授業改善に活かす。	全カリ英語の到達目標を示し、4年間を通しての学びを継続的に考える場所を提供する。
4) 英語学習相談データ ・学習相談来室者 ・ミニ講座参加者	自分の相談内容と、相談後の学習計画・実施結果を記録する。	利用学生全体の相談内容の傾向を把握する。	学生の相談内容を知りプログラム改善に活かすと共に自律学習支援を行う。
5) FD 関連データ ・FD ミーティング ・LMS ワークショップ 出席データ、アンケート		プログラムや学生の概要、到達目標、教授法などを共有し、授業改善に活かす。	FD での要望や LMS ワークショップでの出席データやアンケートをプログラム改善に活かす。

1) は、大学主導で実施されているものであり、教員は学生の授業評価に基づいて自らの授業改善に取り組むことが期待され、また、学生は TOEIC® スコアを知ることで自らの実力把握、学習計画などに活かすことが期待されている。全カリ英語コーディネーターは TOEIC® スコアについてはこれを見て大まかな学生の動向を知り、クラス編成を行う程度の活用を行っているが、それ以上に個人レベルに踏み込んだ活用はできず、教員の授業評価については、これを閲覧することはできない。したがって、この 1) のデータはプログラム全体の教育力の向上や教材開発に直接活かされることはない。全カリ英語が積極的に活用しているのは次の 2) から 5) の 4 点である。

2) は、プログラムコーディネーターが中心となって行う調査から得られるデータであり、プログラム改善に直接活用できるものである。これには、全カリ英語プログラムとして実施する学生満足度調査、各科目コーディネーターが行う科目別アンケートなどがある。

3) は、2009 年に採択された文部科学省 GP 支援を受けて導入された LMS（Learning Management System, 学習管理システム）を利用して収集しているデータを示している。

4) は、2009 年の GP 支援を利用して設置された英語学習サポートルームにおける英語学習相談とミニ講座利用者から得られるデータである。

全カリ英語の教育目的(2)

自律英語学習者の育成と支援

- ・授業・学内講座・施設などの
学習環境整備
- ・授業外学習習慣の形成と継続
- ・入学から卒業までの英語学習支援

図5 全カリ英語の教育目的 (2)

5) は、学生を対象とする上記 2)、3)、4) とは異なり、全カリ英語担当教員を対象として行われる FD 行事から得られるデータである。

2.2 データ利用の経緯

2.2.1 第 1 回学生満足度調査を受けてプログラム改革に着手

全カリ英語は 2003 年に開始したが、3 年目の 2005 年に、当時の外国語教育研究所が主導して、獨協大学が提供する各言語についての学生の満足度調査を行った。これは、大学が実施する学生の授業評価とは異なり、外国語科目に特化したものである。全カリ英語プログラム開始早々から、TOEIC® スコア平均点が伸び、プログラムへの高評価が出るのではないかと期待があった。これに反し、英語力が伸びたと思う学生が 4 分の 1、伸びたと思わない学生が 6 割近くいた。さらに、プログラムに満足感を持っている学生が 3 割であるのに対し、約半数の学生が否定的な回答をした。このように、プログラムコーディネーターの感覚と、実際の学生の受け止め方が大きく異なることを数字で突きつけられ、「教師の勘」や「感触、手応え」で判断することの危険性を実感した。この満足度調査結果をきっかけとして、本格的に本プログラムの目的を考え直し、改革を進めることとなった。

プログラム改革前半の 2006 年～2008 年は、プログラムの教育目的を先に述べた「EGAP 教育」と「自律学習者の育成と支援」に定め、まず教員側の教育環境を整える取り組みを開始した。プログラムの大きさを鑑みると、各教員の多様性を活かしつつも、教員集団としての教育力向上を目指す努力が必要だと考え、種々の改善に着手した。それらは、EGAP を柱とする全カリ英語の理念と運営方針を明文化したスタッフハンドブックの作成、リスニングなどの統一科目の再構成、推薦教科書リストの見直し、プログラムの 9 割以上のコマを担当する非常勤講師を対象とする FD ミーティングの刷新などである。これらの改革を始めて 4 年目に、2009 (平成 21) 年度の文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」に採択された。テーマは「学士力の育成に資する EGAP 教育の充実」である。

2.2.2 文部科学省 GP 支援を受ける

プログラム改革の後半、文部科学省の支援を受けた 2009 年～2011 年の 3 年間は、学生が自律した学習者になることを教員がいかに支援できるかということに主眼を置きつつ、図 7 にある 8 つのプロジェクトを統合的に進めた。これらの 8 つの取り組みを有機的につなぐツールとして LMS (Learning Management System, 学習管理システム) を導入した。LMS は数社を調査したのち、Blackboard™ に決定した。Blackboard は定評ある学習管理システムであるが、全カリ英語の教育目的「自律学習者の育成と支援」の実現に近づくため、必要なカスタマイズを行った。その中心となるのが、「英語学習ロードマップ」と「EGAP Can-do list」である。これら 2 つのページとそのデータについて報告する。

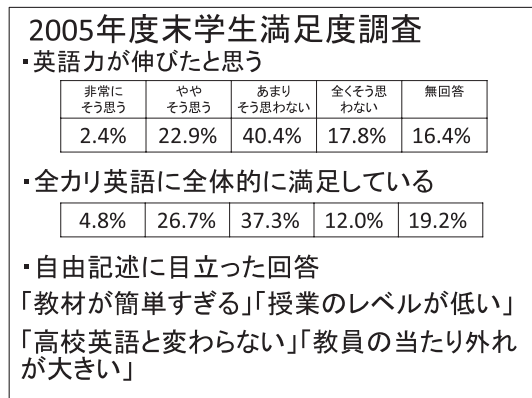


図 6 2005 年度末学生満足度調査

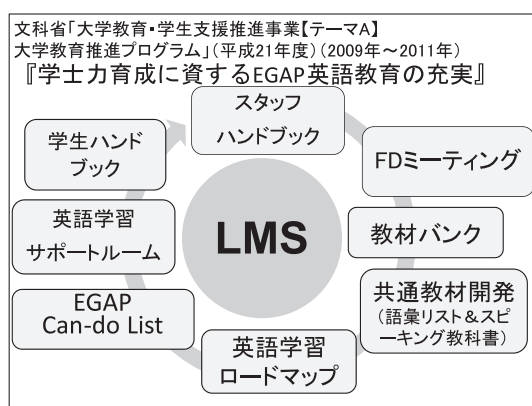


図 7 文科省 GP 取り組みの概要

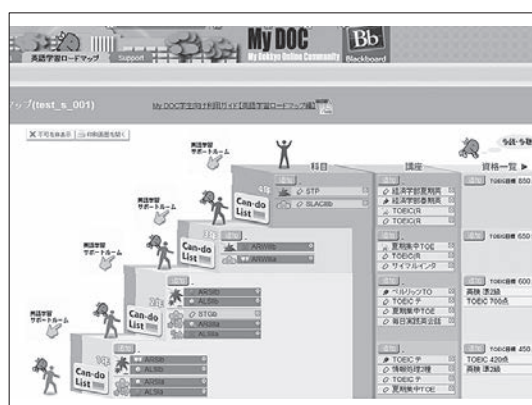


図 8 英語学習ロードマップ

2.2.3 英語学習ロードマップ

英語学習ロードマップは、自律学習者の育成と支援を目指すための学生一人一人に割り当てられた個人ページである。階段状になった画面に、1段目の入学から4段目の4年生まで、全カリ英語の必修科目と選択科目の履修履歴、成績、受講したカリキュラム外の講座、資格試験の受験履歴、多読・多聴の記録などが一目でわかるように配置されている。このページの特色は、学生が各自入力する形になっていることである。大学の教務システムと連動して成績を知らせるシステムとしての運用は行っていない。すべて学生が自ら書き入れるところに意味がある。学習者が自らの学習に対して決定権を持つときに自律性が高まると考えるからである（Scharle and Szabó, 2000 他）。

2.2.4 EGAP Can-do List

英語学習ロードマップとともに大きな意味を持つのが EGAP Can-do List を用いての自己学習の振り返りである。Can-do list は読んで字のごとく、「～ができる」という記述文を読み、自分がそれをできるかどうか判断してチェックするものである。全カリ英語では、春学期と秋学期の最後に、各自入力する期間を設け、その学期の学習を振り返る機会を提供している。

このリスト内には、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング、ボキャブラリーの5つのカテゴリーに「I can ...」という能力記述文（descriptors）が配置されている。Can-do list は全カリ英語の根幹をなすものであり、各科目のコーディネーターが、学生に対してはこのような言語スキルを身に付けてほしい、各担当教員に対してはこのような言語スキルを指導してほしいという明確なメッセージを発信している。学生は、オンラインで一つ一つの能力記述文に対し、Excellent, Very good, Good, Okay, Need Practice の5段階で自己評価を行う³⁾。

EGAP Can-do List を用いて定期的に自己評価を行った学生は、蓄積されたデータをオンラインで確認し、推移を検討する。自己評価の変化を実感し、学習の振り返り、計画の修正、および再度の取り組みを行う。また、このデータはクラスごとに担当教員・コーディネーター教員も閲覧することができる。さらにその結果をエクセルファイル形式でダウンロードすることができ、担当クラスの傾向を知ることが可能となる（図11）⁴⁾。この場合、EGAP Can-do List をチェックリストではなく到達目標のガイドラインととらえ、多くの学生が苦手だと回答したスキル・ストラテジーを授業でより丁寧に教えるなど、授業改善、教材作成などに活かすことができる。これは、ある意味でFDにつながるものと考えられる。また、科目コーディネーターはその科目履修者全体の EGAP Can-do List への回答状況を閲覧し、カリキュラム改善に役立てている。

EGAP Can-do List 入力後には、各学生は引き続き Blackboard

図9 EGAP Can-do List

図10 EGAP Can-do List 学生の確認画面

集計対象: 2013春秋【月5】English(Academic Reading Strategies Ia)				
登録学生の合計: 22				
	2014/2/7	2013/7/20		
Reading				
Basic Reading Strategies				
1.I can think of what I already know about a topic before reading.				
全体人数	22	22		
No Answer	3	5		
Need Practice	1	3		
Okay	3	4		
Good	8	7		
Very Good	5	3		
Excellent	2	0		
2.I can predict the content and text organization by looking at a title, headings, pictures, and diagrams.				
全体人数	22	22		
No Answer	3	5		
Need Practice	0	2		
Okay	5	6		
Good	6	4		
Very Good	8	5		
Excellent	0	0		

図11 EGAP Can-do List クラス別集計表

1年生第1回目入力後の学生の反応(2011年夏)			
質問	はい	いいえ	無回答
全カリ英語Can-do Listに答えてみて、大学で練習する具体的な英語スキルのイメージを持つことはできましたか。	859人	145人	86人
	78.8%	13.3%	7.9%

図12 Can-do List 入力後の学生の反応

上でアンケートに答えることになっている。図 12 に示したように、学生の反応からは、Can-do List に答えることにより、全カリ英語で何を学ぶのか、というイメージが明確になっていることがうかがわれる。近年、中学・高等学校でも学習到達目標設定の手引きとしての Can-do List の使用が推奨されている⁵⁾。しかし、2011 年の調査では高校時代に Can-do List を使用した経験のある学生はほとんどおらず、この Can-do List をきっかけとして獨協大学生として英語を学ぶ上での目標を持ち、自分の力を客観視することにつなげていることがうかがえた（飯島、2012）。

2.2.5 英語学習相談

近年、自律学習者の育成を目標の一つに据えた「セルフ・アクセス・センター」あるいは「ラーニング・センター」を設置する大学が増えている（尾関、2010）。全カリ英語では、GP 補助金を基に、学習相談を主な目的とした「英語学習サポートルーム」を設置した。全カリ英語は前述の通り、授業担当者に占める非常勤教員の割合が極端に高く、出講コマの 9 割以上が非常勤教員によって担当されている。非常勤教員はオフィスアワーを持たないため、学生はいったん教室を出ると、教員とアポイントメントを取って質問したり、個別の指導を受けたりすることが難しくなる。自律した学習がまだ身についていない学生に対するサポートを考えていく中で、LMS を導入することで、学生がオンラインで種々の情報にアクセスし、また、担当教員とコンタクトを取ることが可能となった。しかし、オンラインだけでなく、一対一の対面方式を取った学習相談ができる空間が重要だと考え、この英語学習サポートルーム設置を企画した。

英語学習サポートルームは、特定の分野に特化した（たとえばライティングセンターのような）施設ではない。英語学習相談員は、勉強を教えるのではなく、勉強の仕方（ラーニング・ストラテジー）を教えるのである。学生と一緒に計画を立て、学びを見届け、必要に応じて計画の修正のアドバイスをする。

この学習相談の開始準備として、全カリ担当教員は英語学習相談の専門家による研修を受け、相談を受ける側の心構えや技術を学んだ。また、全カリ担当教員専任教員の中からサポートルームのコーディネーターを担当する教員を決め、このコーディネーターが運営のガイドライン冊子を作成して開室に臨んだ。2014 年度は週 4 日開室しており、外部の専門相談員が 1 日、研修を受けた本学特任・非常勤教員が 3 日担当している。学生の相談内容としては、4 技能を伸ばすための学習方法、留学についての考え方や準備の仕方、資格試験対策（TOEIC[®]、TOEFL[®]、IELTS[®]、公務員など）、文法・語彙・発音などの学び方、自分の学習スタイルの発見の仕方など様々である。1 セッションは 20 分であるが、各セッションの前に学生は自分の相談内容を用紙に記入し、自らの学びを振り返る機会を持つ。相談終了直後にはアンケート用紙に記入して、相談員とのコミュニケーションがうまくいったかどうかを振り返る。さらに、LMS を開き、学習相談のページにいつ、どのような相談をして、どんなアドバイスを受けたかを記入することになっている。自分の学習について記録し、振り返ることは、自律学習者へのトレーニングになる。



図 13 英語学習サポートルーム

英語学習相談のコーディネーターもいろいろな情報を収集して、相談の質の向上に努めている。たとえば、年度別・学科別利用者数の集計、男女別、学年別の集計などである。利用状況を検討することによって、利用者全体の傾向を把握すると同時に、学習相談をすることそのものに慣れていない学生への働きかけ方を考える。さらに、コーディネーターが相談の様子を隣室で聞き、相談員と相談内容を振り返るフィードバックセッションを設け、学生からのアンケート結果と合わせ、相談技術の向上に努めている。この結果、多くの学生が相談を一度で終わらず、何度もサポートルームに足を運んでいる（Iijima, Tsujita, & Wakabayashi, 2012）。

この英語学習サポートルームは本プロジェクトの要であり、今後その方向について話し合いながらより使いやすい、訪れやすいサポートルームにしていくべく、さらなる情報収集を図っている。

3. まとめと今後の課題

3年間のGP補助金を受けて取り組んだ、教育内容と環境の改善の成果を見るために、GP最終年度末に学生の満足度調査を実施した。2005年度には満足と答えた学生が約3割に過ぎなかった（図6）が、2011年度末には、約6割が満足と答えている（図14）。2005年度の満足度調査の結果を受けて進めてきたプログラム改善であるが、6年目にしてようやく過半数以上の学生がある程度の満足感を持つてくれるようになったことは大きな成果だと言える。しかし、まだ4割の学生が満足感を持っていないという現実を踏まえ、GP補助期間終了後もプログラム改善を続けている。

最後にデータ活用における今後の課題を挙げる。本稿で紹介した満足度調査とLMSについて考えると、以下の2点を直近の問題と考える。

1. プログラム独自のアンケート、学生満足度調査からは有益なデータが得られるが、これらの調査を学内のどこに位置付け、どのように評価するのか、ということがはっきりしていない。プログラムのコーディネーターが立案・実施を行うため、業務負担が大きい。学内の自己点検評価室が実施している「学生による授業評価」は教員個人のみを対象とし、フィードバックも教員個人に行われるのみであり、プログラムの評価には直接結びつかない。
2. LMSを介するデータも有益であるが、デジタルネイティブと呼ばれる学生たちが不自由なく使うのに対し、教員の利用率は伸び悩んでいる。特に非常勤講師が担当する授業の割合が極めて高い本プログラムでは、非常勤教員の意識改革を伴うようなFDが必要である。全カリ英語プログラムは発足当時から毎年非常勤講師を対象としたFDミーティングを実施し、LMSについても毎年ワークショップを複数回開いているが、さらなる教育力向上のために今後の方向性をしっかりと作っていくことが重要である。

プログラム改善に臨み、何らかの変化や改革を目指そうとすると、データを用いた説得力のある説明や運営が必要となる。しかし、本プログラムにおいては、データ収集の計画・実施、結果の解釈、そして授業実践やカリキュラム開発への活用については、ほぼすべてをコーディネーターが担当してきた。これは、業務負担の量においても、データ解釈の正しさにおいても、最善の方法とは思えない。大規模な英語プログラムでのデータの活用には、大学の執行部のリーダーシップ、関連部署の協力が必要だと考える。

語学の教員は、最近までどちらかというと、職人技で授業を行っていたのではないかと。プロフェッショナルとしての個々人の経験に基づいた実践は極めて重要ではあるが、プログラムが大きくなればなるほど、教員個人だけでなくプログラム全体としての教育力向上が必要である。このような場合、情報、数字、経験などは積極的に共有すべきであり、蓄積すべきである。このために不可欠なのが大学のバックアップと、教員サイドと事務局サイドとの一歩踏み込んだ協働である。本プログラムも2003年の発足以来11年目を迎え、さらなる教育力向上に向けて、現状に満足することなく挑戦を続けていきたいと考えている。

2011年度末学生満足度調査

これまで受けた全カリ英語の授業について総合的に満足している。（カッコ内は05年度調査、ともに無回答を除く）

非常にそう思う	14.7% (←4.8%)
そう思う	45.2% (←26.7%)
あまりそう思わない	30.5% (←37.3%)
まったくそう思わない	9.4% (←12.0%)

図14 2011年度末学生満足度調査

注

- 1) 筆者は本プログラムの9名のコーディネーターの一員であり、本稿で述べることは筆者の個人的な見解ではなく、コーディネーター全員の長期間にわたる実践の結果である。その意味で、筆者は飯島優雅准教授をはじめとする本プログラムのコーディネーター教員全員に謝意を表すものである。
- 2) 本稿は2014年3月18日に京都大学で行われた第20回大学教育研究フォーラムでの発表を基に、多少の展開を試みたものである。フォーラムで用いたスライド等を示し、なるべく発表の内容を視覚的に理解して頂けるように試みた。なお、本プログラムについてのより詳細な報告については、岡田・飯島（2013）を参照されたい。
- 3) これらの能力記述文は、5つのスキルで合計192文ある。EAP先行研究、ヨーロッパ言語共通参照枠（Council

of Europe, 2001)などを参考に、獨協大学全カリ英語プログラムで学ぶ学生に身に付けてほしい EGAP の言語スキル・ストラテジーのリストをコーディネーター教員が作成したものである。

- 4) 各学生の回答は個人情報ととらえ、担当教員は個人別のデータは閲覧できないしくみとなっている。教員が閲覧できるのは、クラスごとの集計のみである。
- 5) 文部科学省では、「CAN-DO リスト」と表記している (文部科学省、2013)。

参考文献

- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Iijima, Y., Tsujita, M., & Wakabayashi, R. (2012). Establishing an English learning advising service: A case of the “English Learning Support Room” at Dokkyo University. In C. Ludwig, & J. Mynard (Eds.). *Autonomy in language learning: Advising in action* (pp. 39–58). Canterbury, UK: IATEFL.
- 飯島優雅 (2012). 「Blackboard Learn (TM) を活用した「全カリ英語 EGAP Can-do List」開発と運用」『獨協大学情報学研究』第 1 号, 65–74 頁.
- Jordan, R. R. (1997). *English for academic purposes*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編). (2010). 『英語教育学大系 \$6 成長する英語学習者—学習者要因と自律学習』. 大修館書店.
- 文部科学省 (2013). 『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf
- 岡田圭子・飯島優雅 (2012). 「学士力育成に資する共通英語教育の環境整備」『第 18 回大学教育研究フォーラム発表論文集』51–52 頁.
- 岡田圭子・飯島優雅 (編). (2013). 『継続的な英語教育改革の過程と成果—学士力育成に資する英語教育の充実』. 獨協大学全学共通カリキュラム英語部門 2003–2012 年度実践報告書.
- 尾関直子 (2010). 「自律した学習者を育てるセルフ・アクセス・センターを活用した英語教育モデルの構築」『明治大学人文科学研究所紀要』第 67 冊, 155–176 頁.
- Scharle, A., & Szabó, A. (2000). *Learner autonomy: A guide to developing learner responsibility*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 田地野彰・水光雅則 (2005). 「大学英語教育への提言—カリキュラム開発へのシステムアプローチ—」竹蓋幸生・水光雅則 (編)『これからの大学英語教育』岩波書店, 1–44 頁.